親のタイプA行動パターンと子どもに対する学歴志向との関係

大芦　治・山崎久美子*
倉敷芸術科学大学教養学部
*東京医科歯科大学教養部

(1998年9月30日　受理)

タイプA行動パターン（以下，タイプAと略す。）の発達に関する研究は，これまで主に両親と子供の関係の分析を中心に行われてきた。これらの研究は，①両親の養育態度が子供のタイプAの発達に与える影響を検討する方向（たとえば，Blaney, Blaney &, Diamond, 1989; McCranie & Simpson, 1986）と，②親子間のタイプAの類似性からタイプAの発達のプロセスを想定していこうとする方向（たとえば，Matthews & Krantz, 1976；大芦・山崎，1998）の双方から研究が進められてきた。

大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）の研究は，養育態度が子どものタイプAの発達に与える影響を検討したものであるが，ここでは以前の研究に加え新しい視点が取り入れられた。すなわち，子どものタイプAの発達を促進するような両親の養育態度があるならば，そのような養育態度は何が原因となって引き起こされるのかということについてである。それ以前の研究では，養育態度の背後にある要因についての検討が見逃されてきたのである。そのような訳で，大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）の研究で着目されたのが，タイプAの発達を促進する養育態度の背後にある社会・文化的な要因であった。

そこで取り上げられた社会・文化的な要因は，教育に関するものである。いうまでもなく我が国は，世界でも有数の受験戦争の激しい国である。有名大学に進学することは就職，結婚等々将来が約束されるという期待の下に，中学生，高校生は進学競争に励んでいる。大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）の研究では，このような我が国の教育環境に蔓延する価値観を，“学歴志向”と呼んでいる。そして，両親がこの学歴志向という価値観をもっていた場合は，それがタイプAを発達させるような養育態度を引き起こすのではないかという仮説を立て，それを実証している。

大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）の研究ではこの仮説はおおむね確認された。ただし，子どもが男子か女子かによって，両親のどちらから影響を受けるかに若干の違いが見られた。すなわち，子どもが男子の場合母親からの影響が大きく，逆に，子どもが女子の場合どちらかといえば父親からの影響が意味あるものとなっていた（図1）。

一方，大芦・山崎（1998）は，タイプAの発達研究の一方の流れ，すなわち，親子間の

男子の場合

母親の学歴志向 → タイプAを促進する母親の養育態度 → 男子のタイプA行動パターン

女子の場合

父親の学歴志向 → タイプAを促進する父親の養育態度 → 女子のタイプA行動パターン

図1　養育態度の影響の性差

タイプAの類似性を検討しタイプAの発達のプロセスを明らかにしてゆく研究にも取り組んだ。そこでは，母親と女子間のタイプAの類似性が主に認められ，母親と女子間にタイプAの観察学習が成立している関係が示唆された。なお，タイプAの親子間の類似性に関する検討は現在もつづけられている。現在，父親と男子間の観察学習が成立するかどうかが吟味されている。仮に，父親と男子間の観察学習が行われていたと仮定すると，先に述べた養育態度に関する研究の結果を含め，図2のようなモデルが考えられる。

男子の場合

母親の学歴志向 → タイプAを促進する母親の養育態度 → 男子のタイプA行動パターン

↑

父親のタイプA → （観察学習）

…… 検討中 ……

女子の場合

父親の学歴志向 → タイプAを促進する父親の養育態度 → 女子のタイプA行動パターン

↑

母親のタイプA → （観察学習）

図2　養育態度，観察学習を組み込んだタイプAの発達モデル

さて，先ほども述べたように一連の研究では，タイプAの発達モデルに社会・文化的要因の1つである“学歴志向”を組み入れることを目標においてきた。そして，大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）の研究では，学歴志向が親の養育態度を通して，子どものタイプAの発達に寄与していることを確認した。そこで，次に問題になるのは，両親の学歴志向が養育態度ではなく親自身のタイプAとどのように関係しているかである。もし，タイプAの両親が学歴志向をもちやすいということがあるとすれば，学歴志向は両親自身がタイプAであるということとも関連して子どものタイプAの発達に寄与している可能性がある。以上を図示したのが図3である。

本研究の目的は，以上のような両親の学歴志向と両親自身のタイプAの関係を検討することにある。そこで，今回は，すでに行われた調査の中から父母のタイプAと学歴志向に関する質問紙の結果を取り出し，両者の相関係数を算出することで，何らかの関連が見ら

男子の場合

母親の学歴志向 → タイプAを促進する母親の養育態度 → 男子のタイプA行動パターン

↑

父親の学歴志向 → 父親のタイプA → (観察学習)

…… 本研究の検討箇所 …… …… 検討中 ……

女子の場合

父親の学歴志向 → タイプAを促進する父親の養育態度 → 女子のタイプA行動パターン

↑

母親の学歴志向 → 母親のタイプA → (観察学習)

…… 本研究の検討箇所 ……

図3　本研究で検討する箇所を組み込んだタイプAの発達モデル

れるか確認してゆく。もちろん，ここで行われる分析は父母のタイプAと学歴志向の相関係数を算出するだけであり，両者の因果関係を特定するものではない。父母がタイプAであるから学歴志向をもったのか，あるいは，元々学歴志向が強かったためにタイプAになったのか，ここでは特定できない。そういう意味では図3の「父（母）親の学歴志向→父（母）親のタイプA」の矢印は，一つの目安でしか過ぎない。しかし，いずれにしろ，両者の因果関係を云々する以前の問題として，そもそも何らかの関係が存在するかどうかを検討するのが本研究のとりあえずの目的である。

方　法

被 験 者

東京周辺の国立大学1校，および，私立大学2校の父母705名（父親352名，母親353名）。平均年齢は父親50.99歳（SD＝4.17），母親47.95歳（SD＝3.66）。なお，本被験者は，大芦・山崎（1998）の調査Bの父母の被験者と同じである。

質 問 紙

今回分析された調査は，以下の2つである。

学歴志向質問紙；学歴志向を問う質問紙としては，新たに42項からなる学歴志向質問紙を構成した。これは大芦（1995），大芦・岡崎・山崎（1996）で用いられた学歴志向を問う質問項目に検討を加え新たな項目を加えたもので，①高い学歴を求め，名門大学に進学することを価値あるものとする態度，②高学歴，名門大学進学などを自分の子どもに期待する態度，③高学歴を求め，名門大学に進学する手段としての受験産業，進学競争を積極的に是認する態度などを問うものである。父母がこの質問紙を回答するにあたっては，主に，調査対象の子どもが中学生，高校生時代のことを思い出して評定してもらうようにし

た。

タイプA行動パターン評価尺度（改訂版）；タイプAを測定する質問紙としては岡崎・大芦・山崎（1995）によって作成されたタイプA行動パターン評価尺度（改訂版）が用いられた。この尺度は①「気性の激しさ，短気，それに伴う話し方」（以下「短気と話し方」と略す。），②「仕事熱心」，③「時間的切迫感」の3つの下位尺度から構成されている。各尺度の項目数は「短気と話し方」の下位尺度が13項目，「仕事熱心」が9項目，「時間的切迫感」が3項目，合計25項目である（大芦・山崎，1998の付表2参照）。

手続き

他の研究と同時に複数の質問紙を小冊子に綴じて，父母の分も含め学生に配布した。子どもは自宅に持ち帰り，子ども自身，および，父母はそれぞれの該当する部分を自記式で回答した。なお，回答の順序は子ども，父母のいずれから記入してもよいこととし，特に指定はしなかった。子ども，父母のすべての箇所が記入された後，子どもを通して回収された。今回分析の対象にするのはそのうち父母の分である。

結果と考察

学歴志向質問紙の因子分析

まず，学歴志向を問う質問項目42項目に対して因子分析を実施した。因子分析は，主因子法，共通性の推定法はSMCとし，バリマックス回転を施した。因子の抽出数は3因子，4因子，5因子の3通りを設定し，それぞれについて父母の別に計算を行った。以上の過程で，父母のいずれを計算した場合でもどの因子に対しても因子負荷量．3以上で負荷しない項目や，逆に複数の因子に対しておよそ．4以上の因子負荷量をもつ項目などは順次削除し，その都度再計算を行った。最終的に11項目（項目番号，9．

表1　学歴志向質問紙の因子分析の結果（父親）

項目番号	第1因子	第2因子	第3因子
5	.6986	.1788	−.1365
16	.6955	.0519	−.0354
6	.6823	.2256	−.1566
3	.6787	.1310	−.1738
32	.6606	−.0124	.0624
38	.6405	.0607	−.0086
25	.6103	.0203	−.1708
11	.6002	−.0108	−.0962
22	.5883	−.0647	.0795
20	.5715	.1164	−.0306
8	.5713	.0869	.0878
34	.5658	.0830	−.0223
19	.5194	−.0435	.0350
17	.3986	.0955	.0162
1	.3453	.2698	−.0332
30	−.2992	−.2321	.0681
42	−.4416	−.0220	.2692
26	−.4421	−.1246	.2292
40	.0725	.6259	.1642
24	.1891	.5193	.0629
2	.2736	.4119	−.1516
21	.1638	.2256	.1233
39	−.0220	−.3348	.2709
28	−.0015	−.3876	.2545
36	.1634	−.4634	.0855
4	−.0468	−.5732	.0430
7	−.1694	.1038	.5852
13	−.3003	−.0068	.5558
10	−.0368	−.0150	.3895
41	.0685	−.1850	.3018
12	.2604	−.0485	.2605

（注）因子負荷量が点線で囲まれた箇所は，当該項目がその因子に属するものとして加算されたことを示す。

表2　学歴志向質問紙の因子分析の結果（母親）

項目番号	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子
5	.7025	−.0686	−.0759	.0636	−.2071
6	.6682	−.0941	−.0871	.1862	−.1730
32	.6507	.0408	−.0219	−.0784	.0466
38	.6481	−.0181	.0831	−.0714	.0428
16	.6157	−.0225	−.1796	−.0172	.0669
3	.5946	−.1290	−.0911	.0293	−.0218
20	.5669	−.0249	−.0045	−.0468	.0087
25	.5618	−.0496	−.0930	.0059	.0732
11	.5182	.0970	−.1503	.1889	−.0454
19	.4988	−.0076	−.3615	.1859	.2573
22	.4895	−.0737	.0582	.1262	.0580
8	.4593	−.1938	−.2834	.2035	.2149
34	.4374	.0565	−.1940	.1355	.2966
17	.3941	−.0776	−.2430	.0214	.0820
1	.3513	−.2934	−.1429	.0987	−.1754
21	.3054	−.2857	.0794	.0350	.0165
42	−.3363	.0544	.2831	−.0523	.1774
30	−.4331	.2137	.0235	.2255	.1348
26	−.4476	.0174	.2299	.0711	−.0232
4	.1061	.6869	.0428	.1020	−.0323
36	.1830	.5143	.0893	.1561	.0792
28	−.0301	.3490	.2262	.19220	.1353
2	.2199	−.4274	.1450	.2915	−.0545
24	.1791	−.4843	.0697	.1015	−.1257
40	.1143	−.4973	.1586	.0340	.0004
13	−.1277	.0455	.6553	.0519	.1695
7	−.1237	−.0772	.5950	.0510	.1428
10	−.1370	−.0026	.1704	.6341	.0515
12	.1555	.0548	−.0714	.5946	−.0592
41	.1511	.0395	.2545	−.0778	.4861
39	−.0651	.1951	.1338	.0354	.3919

（注）因子負荷量が点線で囲まれた箇所は，当該項目がその因子に属するものとして加算されたことを示す。

14．15．18．23．27．29．31．33．35．37．）を削除し31項目で因子分析を実施し，父親は3因子，母親は5因子を抽出した。回転後の因子負荷量を表1，表2に，質問項目を表3に示す。なお，因子分析に基づき尺度得点を算出するに際しては，因子負荷量が．3に満たない項目は除き，粗点（1～4点）を合計した。また，因子負荷量がマイナスの項目については粗点を反転して計算した。

まず，父親（表1）についてみる。第1因子（17項目，項目番号，1．3．5．6．8．11．16．17．19．20．22．25．26．32．34．38．42．）は「入学する大学は，できるだけ偏差値が高い大学が望ましいと考えていた」「学歴は，有利な人生設計のための手段となりうるものだと思っていた」など学歴志向の中心的内容を問う内容なので「学歴志向の因子」と名づけた。また，第2因子（7項目，項目番号，2．4．24．28．36．39．

表3　学歴志向質問紙の質問項目

1．進学競争が激しいのは，現代の社会の流れでありやむを得ないことだと思った。
2．受験勉強は，人間性を鍛えるという点では決してマイナスではないと思っていた。
3．世の中に出て他人から笑われないだけの大学に進学して欲しかった。
4．親の側から見ても，進学競争の激しさには賛成しかねることが多かった。
5．入学する大学は，できるだけ偏差値が高い大学が望ましいと考えていた。
6．知名度のある大学に進学すると将来の道も開けるから，受験勉強はやむを得ないことだと思っていた。
7．子どもの進学や受験のことには，はじめから関心はなかった。
8．学歴は，親が子どもに授けることができる最大の資本だと思っていた。
9．大人の世界で成功するために重要なのは，学歴よりも人間関係（いわゆるコネ）であると思っていた。
10．知名度のある大学に進学するよりも，資格や技術の身に付く大学に進学して欲しかった。
11．受験，進学のことを考えると，子どもの学校や予備校での成績がひどく気になった
12．できれば何か資格がとれる学部に進学して欲しいと思っていた。
13．わが家は進学競争や受験戦争とは無関係であり，関心をもったことはなかった。
14．子どもには，蛮カラな校風の大学にはあまり進学して欲しくないと思っていた。
15．受験勉強は，努力することや忍耐力をつけるよい機会だと思っていた。
16．学歴は，有利な人生設計のための手段となりうるものだと思っていた。
17．高い学歴を身につけることは，すぐれた人格や人間性を養うことにつながると思っていた。
18．日本のような国では，最後は，学歴よりも家柄できまると思っていた。
19．世間に出て納得されるだけの学歴を身につけてやることは，親のつとめだと思っていたし，子どもにもできるだけそうしてやった。
20．自分の子どもが，有名大学に入れなかったら，近所や知人や親類の手前，はずかしかっただろう。
21．受験ということは，世間一般に普通に行われていることで，特に反対することも，賛成することもなく世の中の流れにしたがわせた。
22．受験する大学や，学部の選択は，将来の就職や結婚などに有利になるように選ばれるべきだと思っていた。
23．中学，高校は，もっと資格や技術を身につける教育をするべきであると思っていた。
24．受験勉強のために人間性が損なわれるという意見には，それほど根拠があることとは思っていなかった。
25．学歴は，現在の日本で生きてゆくためには必要であると思っていた。
26．子どもがもし大学まで進学できなかっとしても，親として後悔しなかっただろう。
27．大学は，技術や資格を身につけるためには，あまり役に立たないと思っていた。
28．中学，高校時代は育ち盛りだから本当は好きな趣味やスポーツに打ち込んで欲しかったというのが本音である。
29．進学競争は，必要悪（良くないことだけれど，必要だからやむ得ないこと）だと思っていた。
30．有名校に進学することだけが人生の目的ではないと思っていたし，子どもにもそのように話していた。
31．勉強よりも，何か好きなことを身につけて欲しかった。
32．有名大学に進学することは，将来の経済的安定をもたらすための近道と考えていた。
33．無理に有名大学に進学するよりも，自分の趣味にあった生き方をして欲しいと思っていた。
34．大学受験に有利な中学，高校に進めるようにできるだけ努力したつもりである。
35．子どもが偏差値の高い高校，大学よりセンスやイメージのよい高校，大学に入ることを望んでいた。
36．こんな進学競争の激しい時代に生まれた子どもを可哀そうだと思った。
37．子どもの将来にとって大切なのは，学歴よりも家柄や財産の方であると思っていた。
38．学歴は，社会的成功のための一番の近道と考えていた。
39．子どもが進学競争に巻き込まれないように極力努力したつもりである。
40．現在の日本の受験制度は，それほどひどいものだとは思わなかった。
41．附属校に進学したり，推薦制度を利用することで受験戦争に巻き込まれないで済むことは，大変よいことだと思っていた。
42．仮に，近所の子どもや友達が受験の準備をしているのに自分の子どもがそうしたことをしていなかったとしても，不安にはならなかったと思う。

40.）は「現在の日本の受験制度は，それほどひどいものだとは思わなかった。」などの項目を含むもので「進学競争の是認」の因子と名づけた。さらに，第3因子（4項目，項目番号，7．10．13．41．）は「子どもの進学や受験のことは，はじめから関心はなかった。」という項目に代表されるもので「進学に対する無関心の因子」と名づけた。

次に母親（表2）についてみる。第1因子（19項目，項目番号1．3．5．6．8．11．16．17．19．20．21．22．25．26．30．32．34．38．42．）は「世の中に出て他人から笑われないだけの大学に進学して欲しかった」「入学する大学は，できるだけ偏差値が高い大学が望ましいと考えていた」など父親の学歴志向の因子とほぼ対応するので「学歴志向の因子」とした。第2因子（6項目，項目番号2．4．24．28．36．40．）は，「こんな進学競争の激しい時代に生まれた子どもを可哀そうだと思った」などの項目を含むもので「反進学競争志向の因子」と名づけた。第3因子（2項目，項目番号7．13．）は「子どもの進学や受験のことは，はじめから関心はなかった」および他の1項目で構成されており「進学に対する無関心の因子」とした。さらに，第4因子（2項目，項目番号10．12．）は「資格取得志向の因子」，第5因子（2項目，項目番号39．41．）は「進学競争回避の因子」とそれぞれ名づけられたが，これらの中でとくに本研究上重要なのは第1因子のみであり，該当する項目が2項目しかない第3～第5因子は実質的な意味は薄いと思われる。

学歴志向質問紙とタイプAの関係について

学歴志向とタイプAの関係を検討するために，学歴志向質問紙の各因子とタイプA行動パターン評価尺度の3つの下位尺度および合計点との間の相関係数を算出した。相関係数の算出は，父母の別に行った。さらに，子どもが男子の場合，女子の場合，両者を併せた場合にそれぞれ分けて分析した。以上の結果を表4から表9に示す。

算出された相関係数はいずれも高くはない。したがって，両親のタイプAと学歴志向の間には強い関係はないことがわかる。しかし，低いながらも有意な相関係数が得られた箇所を概観してゆくと，有意な相関係数が得られているのは，主に父親の場合であることがわかる。もう少し詳しくみてゆくと第1因子の「短気と話し方」および3つの因子を合計した「タイプA得点」で学歴志向と．3程度の相関係数が得られている。これは子どもが

表4　父親の学歴志向とタイプAの関係（子どもが男子の場合；N＝222）

	学歴志向	学歴志向 進学競争の是認	学歴志向 進学に対する無関心
短気と話し方	.26187***	.01210	.03659
仕事熱心	.17235*	−.02174	−.02501
時間的切迫感	.22034***	−.03601	.00049
タイプA得点	.30111***	−.00618	.01876

（注）＊；P＜.05　＊＊；P＜.01　＊＊＊；P＜.001

男子の父親，子どもが女子の父親のいずれの場合でもほぼ同じ値が得られている。ただ，父親の学歴志向質問紙の因子分析から得られた3因子のうち，タイプAと主に関係のあったのは「学歴志向」の因子のみで第2因子以下はほとんど相関があるとは認められなかった。しかし，第2因子以下は項目数も少なく学歴志向の中心的な概念という訳でもないのでやむを得ない。とはいえ，タイプAであることと子どもの教育に対して高い学歴を求め学歴志向を是認するような価値観をもつことの間には，父親の場合についていえば，何らかの関係があることは確かなようである。また，子どもが女子の場合父親のタイプAは学

表5　父親の学歴志向とタイプAの関係（子どもが女子の場合；N＝130）

	学歴志向	学歴志向 進学競争の是認	学歴志向 進学に対する無関心
短気と話し方	.24356**	.23996**	−.11593
仕事熱心	.17310*	.13047	−.06210
時間的切迫感	.21091*	−.13095	.00899
タイプA得点	.28100**	.19106*	−.10316

（注）＊；P＜.05　＊＊；P＜.01　＊＊＊；P＜.001

表6　母親の学歴志向とタイプAの関係（子どもが男子の場合；N＝222）

	学歴志向	学歴志向 反進学競争志向	学歴志向 質問紙無関心	学歴志向 資格取得志向	学歴志向 進学競争回避
短気と話し方	.16184*	.02237	.08726	−.00431	.01609
仕事熱心	.08742	.03684	−.03298	.00847	.02051
時間的切迫感	−.01091	.07247	−.00077	−.05179	−.05062
タイプA得点	.14473*	.04670	.04655	−.01115	.00808

（注）＊；P＜.05　＊＊；P＜.01　＊＊＊；P＜.001

表7　母親の学歴志向とタイプAの関係（子どもが女子の場合；N＝131）

	学歴志向	学歴志向 反進学競争志向	学歴志向 質問紙無関心	学歴志向 資格取得志向	学歴志向 進学競争回避
短気と話し方	.11747	.14778	.06149	.19237*	−.03295
仕事熱心	.16090	−.08758	−.10937	.10072	−.09230
時間的切迫感	−.08155	.14183	.03821	.13590	.06333
タイプA得点	.13048	.08901	−.00130	.20277*	−.04865

（注）＊；P＜.05　＊＊；P＜.01　＊＊＊；P＜.001

表8　父親の学歴志向とタイプAの関係（全被験者；N＝352）

	学歴志向	学歴志向 進学競争の是認	学歴志向 進学に対する無関心
短気と話し方	.25606***	.09235	−.01114
仕事熱心	.17479**	.04048	−.03786
時間的切迫感	.19675***	−.07658	.00157
タイプA得点	.29150***	.06542	−.02142

（注）＊；P＜.05　＊＊；P＜.01　＊＊＊；P＜.001

表9　母親の学歴志向とタイプAの関係（全被験者；N＝353）

	学歴志向	学歴志向 反進学競争志向	質問紙無関心	資格取得志向	進学競争回避
短気と話し方	.13637*	.06541	.08246	.07166	.00773
仕事熱心	.10639*	−.01165	−.06052	.04976	−.01608
時間的切迫感	−.04227	.09804	.01990	.02489	−.00155
タイプA得点	.12749*	.06147	.03430	.07513	−.00199

（注）＊；P＜.05　＊＊；P＜.01　＊＊＊；P＜.001

歴志向の第2因子「進学競争の是認」とも何らかの関係がありそうであるが，子どもが女子の場合だけにしかこの関係が見られない理由はよくわからない。一方，母親のタイプAと学歴志向の関係であるが，全被験者を込みで相関係数を算出した場合いくつかが有意となっているが，相関係数の値そのものは低く積極的に関係があるといえるほどではない。

では，なぜ，父親のタイプAと学歴志向の間には関係があり，母親の場合は同じ関係が認められないかであるが，今のところはっきりとしたことはいえない。1つの推測として考えられるのは，今回研究対象としたような中年の世代では，女性は社会に出て仕事を持って働く機会が男性より少なかったので，タイプA的な競争志向，達成志向をもっている女性でも，学歴等が職業的な達成にとって有利な条件となると見なす傾向が少なかったのではないかと思われる。逆に言えば，男性の場合，学歴は職業的な達成にとってすぐにプラス要因として作用してくるので，競争志向的，達成志向的なタイプA者は学歴志向をもちやすいと考えられるのである。

因果関係とモデルの妥当性について

ところで，上で述べたような推論を加える場合，問題となってくるのは学歴志向とタイプAの2つの変数のどちらが独立変数でどちらが従属変数かということである。この因果関係が現段階で確定できないことははじめにも述べた。しかし，前述の父親と母親の差を説明する推論では，タイプAが独立変数，学歴志向は従属変数となる。そうした場合，親がタイプAであることが学歴志向をもたらし，それが，子どものタイプAの発達を促進するような養育態度を引き起こすという逆の因果関係も考えられる。一方，そもそも一連の研究でとりあげているタイプAの発達モデルの基本的な考え方は，学歴志向という社会・文化的な価値観が基底にありそれが養育態度やタイプAも含めた親の態度を通して子どものタイプAを発達させるという仮説の上に成り立っているのであるから，この場合，学歴志向が独立変数でタイプAが従属変数と考える理由もある。このように現段階では学歴志向と親のタイプAの間の因果関係には様々な可能性が想定され錯綜した感もある。今後は，モデルをいかに整理してゆくかが課題になるであろう。

引用文献

Blaney, N. T., Blaney, P. H., & Diamond, E. 1989 Intrafamilial patterns reported by young type A versus type B males and their parents. Behavioral Medicine, 15, 161－166.

McCranie, E. W., & Simpson, M. E. 1986 Parental child–rearing antecedents of type A behavior. Personality and Social Psychology Bulletin, 12, 493－501.

Matthews, K. A., & Krantz, D. S. 1976 Resemblances of twins and their parents in pattern A behavior. Psychosomatic Medicine, 38, 140－144.

大芦　治　1995　タイプＡの発達と両親の影響－両親の教育熱，学歴志向が子どものタイプＡの発達に影響するか－山崎勝之（編）タイプＡからみた世界－ストレスの知られざる姿－現代のエスプリvol.337　至文堂　Pp. 186－193.

大芦　治・岡崎奈美子・山崎久美子　1996　タイプＡ行動パターンの発達に及ぼす両親の学歴志向および養育態度の影響　発達心理学研究，７，41－51.

大芦　治・山崎久美子　1998　タイプＡ行動パターンの親子間での類似性－２つの調査結果から－倉敷芸術科学大学紀要，３，161－170.

岡崎奈美子・大芦　治・山崎久美子　1995　TYPE　Ａ行動パターン尺度の再検討　日本心理学会第59回大会発表論文集，56.

The Relationship between Parents' Attitudes towards Education and their Type A Behavior Pattern in the Developmental Model of type A

Osamu OASHI, Kumiko YAMAZAKI*

Faculty of College of Liberal Arts and Science
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
**Department of Psychology, Tokyo Medical and Dental University*
Kounodai 2-8-30, Ichikawa, Chiba, 272-0827, Japan

(Received September 30, 1998)

The purpose of this study is to investigate the relationship between parents' attitudes towards education and their Type A behavior pattern in the developmental model of type A (Oashi, 1995 ; Oashi, Okazaki, & Yamazaki, 1996).

The subjects were 705 parents of university students (352 fathers, and 353 mothers). Ss answered the Questionnaire concerned with the Attitides towards their Child's Education (QACE) and revised version Type A Behavior Pattern Assessment Scale (TABPAS ; Okazaki et al., 1995). Then correlation coefficients were computed. There was a mild correlation between father's QACE and TABPAS. But there was no relationship between mother's QACE and TABPAS.

Finally, the implications of the results in the developmental model of type A were discussed.